http://www.nihoncity.com

〒286-0825 千葉県成田市新泉 14 TEL 0476-89-2333 FAX 0476-89-23

日本の未来を見据えて撃つ! そんなあなたにホットな話題をお送りする 最先端オピニオン紙

-山、衝撃の登頂記録

2014年 (平成 26年) 10月 18日発行 第 156刊 毎月第 3 土曜日発行 購読無料

2014年9月23日、秋分の日、 激動の1日が始まりました。 健康で脚力があるうちに、一度 は絶対に登りたいと長年思い続 けてきた富十山の登頂にチャレ ンジする日が、遂に到来したの です。これまで2000メートル 級の山は何十回も登頂し、脚力 と体力には自信があったことか ら、富士山も優に日帰りで頂上 制覇できると考えていました。ま た、どうせ苦労して登頂するなら ば、富士山の頂上からパノラマ の絶景を一望したいと、誰しも 願うのではないでしょうか。そこ で、シーズン中の大混雑を避ける ために、オフシーズンで、しかも 雪の降り始める前の天気の良い 日を、ひたすら待ち望んだのです。

登山のターゲットは9月23日

当年とって 56 歳、もはや若く はありません。そして富士山が いつ噴火するかわからないとい う可能性を考えるならば、今年 を逃したらもう後がないと考え ていました。それ故、9月に入る やいなや、富士登山に関わる情 報を読み始め、天気予報と仕事 のスケジュールとの睨めっこが始 まったのです。今や、かなりの正 確さで10日先までの予報を随 時確認することができることか ら、インターネット経由の情報は、 とても重要でした。そして、天気 予報のデータから、シーズンが 終了し、混雑の緩和される9月 下旬に登山日のターゲットが絞 られてきました。

ところが、9月18日にフィリ ピン沖で発生した台風16号は、 20日はフィリピン、21日は台 湾で大きな被害をもたらし、22 日には中国の寧波市まで襲いか かってきたのです。そしていつ 日本に上陸するかもしれない状

況となり、9月24日以降は天 候が荒れることが予測されまし た。つまり、24日を過ぎると富 士山頂では風が強くなり、雪が 降る可能性も見えてきたことから、 それ以前に出発するしかないこ とがわかりました。そして台風が 到来する前に、晴れの天気予報 がほぼ確定できる日を見つけよ うと日々、天気予報と睨めっこを しているうちに、その晴れ日が 1日だけ見えてきたのです。それ が秋分の日の祭日、9月23日 です。台風の雲がフィリピンから 中国に北上し、そこから進路を 変えて九州方面を覆ってくる状況 下で、秋分の日が正に、ラストチャ ンスであると断定したのです。

四系統ある富士山の登山ルート

富士山に登ろうと決断するま で、どのような登頂ルートがあ るか、知る由もありませんでした。 富士山には主に四つの登頂ルー トがあることをインターネット経 由の情報で知ったのは、登山す る1か月前の話です。富士山は 世界遺産に指定されたこともあ り、整備は行き届いているよう に見受けられ、随所に休憩所や トイレ、山小屋などが用意され ています。そして登山者の経験 やニーズに応じて、四つの登山 ルートから選択し、頂上を目指す ことになるのです。

富士山へ向かう大道は御殿場 ルートでしょう。古代の民は、お そらく南方の御殿場から、なだ らかな富士山の裾野を歩き、頂 上を目指して登り続けたに違い ありません。しかしながら、他 のルートに比べて登山口の標高 が 1000m も低いことから、歩 行距離が大変長くなるだけでなく、 救護所もないため、チャレンジす るにはそれなりの覚悟が必要です。 大自然の恵みに触れながら、 古代の民のような想いに浸って 登山するには、もってこいの ルートと言えます。

その他の3ルートは御殿場

ルートよりも距離が短く、それぞ れに特徴があります。最もポピュ ラーな吉田ルートでは、山梨側 から車で富士スバルラインを経 由して五合目に到達し、登山を 開始します。吉田ルートは山小 屋や休憩所が多く、安心して登 れることから初心者に人気があ り、シーズン中はいつも大混雑し ます。2番人気は富士宮ルートで す。このルートも車を使って富士 山の南側に整備された富士山ス カイラインを経由して五合目まで 行き、そこから登山を開始します。 スタート時の標高は約 2400m と、四つのコースの中では一番 高い場所に位置しています。吉 田ルート同様に山小屋や休憩所 もありますが、登り道も下り道も 全く同じことから、混雑すると 行き来が大変なことがあります。 最後が須走ルートです。このルー トは登山者も少なく、自然を思 い切り楽しめることで、古くから 登山ファンを魅了しています。し かし救護所も無く、ある程度の 登山を経験した人にしか勧める ことはできません。

これら四つのルートの中か ら、9月のオフシーズンに最適 なルートとして選んだのが、富 士宮ルートです。休憩所などが すべて閉鎖された9月下旬でも、 富士山スカイライン経由で五 合目まで車でアクセスすること が可能であり、天候さえ良けれ ば、確実に登山をスタートでき るからです。しかもスタート地点 の標高が高いだけでなく、ほぼ 一直線に登っていくことから山 頂までの距離も短いのです。脚 力に自信があったことから、間 違いなくベストルートに思えまし た。富士宮ルートの標高差は山 頂まで約 1300 mであり、これ まで何度も登っている四国石鎚 山の標高差である800mより も、6割強長いだけです。実際、 石鎚山では麓の成就社から頂上 まで1日で2往復を走った経験 もあることから、日帰りで行き 来するには問題のない距離と心 得ました。後は、絶好の登山日 となることを願うだけです。

富士山登頂の準備は万全!

9月23日の登山日に向けて、 早速、準備にとりかかりました。 富士山の標高は、これまでにな く高いことから、慎重な計画が 不可欠です。まず、歩行距離が 圧倒的に長く、四国石鎚山の2 倍は体力を要すると想定し、マ ラソンレースのようになること を覚悟しました。環境省が発行 する「登下山ルート予想タイム | によると、富士宮五合口からの 登山には4時間20分、下山 には2時間5分、合わせて6 時間 25 分の登下山の時間が 想定されています。また、登山 中に天候が急変することも考え られ、高山病の危険もあります。 よって、あらゆる事態を想定し た上での準備が必要です。

富士山の場合は、自分がこ れまで体験したことがない標高 3776m まで登ることになるこ とから、まず、高山病の予備知 識を得ました。また、これまで 2000m級の山々は幾度となく 登ったことがありましたが、いつ もランニングウェアに軽装備で あったことから、方針の転換が 必要でした。服装についても、と りあえずスタート地点から冬用の 暖かいトレーナーを上下に着て 登ることにしました。

携帯品については歩行距離と 滞在時間が長いことから、これ までよりも多くの水と食料を準 備しました。水は500mlのペッ トボトルを3本、栄養の補給に は、おにぎりや栄養ドリンクに加 え、カロリーメイトを非常食とし て携帯することにしました。そし て万が一の遭難の際を考え、懐 中電灯も用意しました。たまた ま発電式タイプの懐中電灯が手 元にあり、手でレバーを回せば 点灯するという極めて原始的な ものでしたが、十分に役を果た すと考えて持参することにしまし た。まさか、その懐中電灯を実 際に使う事態に陥るとは、知る 由もありませんでした。

登山の準備と言えば、単に備 品をリストアップして用意する だけではありません。一番、大 事なことは体調の管理です。そ れ故、登頂の可能性がある数 週間前から、日々、ランニング を繰り返し、ウェイトトレーニ ングをしながら体全体の筋力を 養い、健康体を保つ努力だけ は怠らないようにしました。体 調は万全。後は、素晴らしい天 候を期待するだけです。

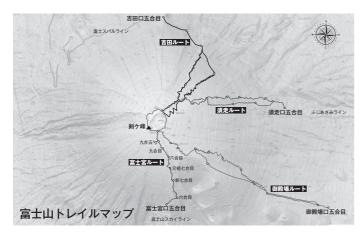
登山準備の落とし穴に愕然!

秋分の日、9月23日の早朝 5時、東京の自宅で目覚めまし た。富士山五合目からの登山 は8時までにスタートすること を、当初から想定としたことから、 5時起きでも十分に間に合う のです。やや遅いスタート時 間ですが、御来光を拝むよりも、 睡眠を十分にとって体調管理を 優先する作戦です。朝から関東 一帯は天気も良く、気温は暖か でした。また、富士吉田周辺の 気温も 22~23 度前後にまで 上がることを予報で確認し、絶 好の登山日和になりそうです。

早朝の東名高速道路は快 適です。車で自宅から出発し、 高速道路を飛ばしながら御殿 場インターで降りて、富士山 を目指しました。オフシーズ ンということで、トイレがな いことも想定されたことから、 コンビニに立ち寄り、備品 の補給を確認したうえで、ト イレも済ますことにしました。 そして車から降りた時、大変 なことに気が付きました。

何と、いつも手放さずに持っ ている2台の携帯電話を、両方 とも家に置き忘れてきたのです。 最悪の失態に絶句! 富十山を登 山する際には、携帯電話は絶対 に必要な情報手段です。それを 持たずに一人で登山するという ことは、万が一の事故や怪我が 生じた場合、大変なリスクを背 負うことになるのです。だから こそ、念入りに準備をしてきた にも関わらず、無念でなりませ ん。しかも、携帯電話のカメラ 機能を使って写真を撮る予定で したので、カメラもないのです。 自分の愚かさに唖然としながら も、ここまで来て引き返すこと は考えられず、什方なくコンビ 二で昔風の使い捨てカメラを購 入しました。39 枚撮りだったの で、一つ買えば十分と思ったの ですが、これも後で大きな後悔 をする結果となりました。

富士山の五合目は目前であ り、一生に一度あるかないかの 富士山の登頂です。これだけ は、どんな代償を支払ってでも 決行する、という気持ちが揺ら ぐことはありませんでした。とり あえずカメラも購入することがで きて一安心。携帯電話は無くて も、遭難しなければよいだけな ので、「大丈夫。」と自分に言い 聞かせ、富士山スカイラインを 目指して車を再び走らせたのです。



山道からの絶景に心が弾む!

富十宮五合目のレストハウスエ リアには、朝7時半に到着しま した。オフシーズンであるだけ に人影はまばらであり、車も登 山道に面した道路に数十台駐車 している程度です。幸い1台分 のスペースが山沿いに空いていた ので、車をそこに停めて、登頂に 向けて最後の確認です。五合目 ということでかなり寒いかと思い きや、車を降りても肌寒くはな <、16~17度程度の感触です。 風もあまりなく、天気も良好です。 これならば軽装で登れると思い、 上着は長袖シャツ1枚の上にト レーナーを着るだけにしました。

駐車場は登山道への入口から 100m ほど離れたところでした が、山の斜面には登山道に沿う ように大きなジグザグを描く道 路の跡が見えました。たまたま そこから降りてくる2人の女性の 方に出会い、「ここからも登れ ますか」と聞くと、「大丈夫です よ。」と言われ、せっかくのチャ ンスと心得、その小道から道跡 に沿って登り始めました。小道は すぐに登山道に合流したことか ら、富士山には歩くこともできる 車両用のジグザグ道があるとい う誤認をしてしまい、それが下 山の際にとんでもない大惨事を 招くことになります。

富士宮ルートの五合目から六 合目までは、岩混じりの荒い砂 のような感触の緩やかな登山道 が続きます。素晴らしい天気に 感謝しながら足早に山道を登り、 10分少々進むと、すぐに六合目 の山小屋に着きました。小屋の 中では2人の男性が話し込んで いて、表にはトイレが並んでいま す。早速、最初で最後と思って ドアを開けようとしても、鍵がか かっていて開きません。よく見る と、利用料が200円のコイン式 になっていて、小銭を入れないと 開かない仕組みです。お金は持 参してきたものの、一万円札を1 枚しか持っていなかったので、お 札の両替をお願いするのも申し 訳なく、トイレくらい1日、我慢 できると自分に言い聞かせて山 小屋を後にしました。富士山は 聖なる山ですから、できることな らば、道端では避けたいものです。

再び登山道に戻って登り始めると、六合目からの道のりは様変わりし、岩場の急斜面が続きます。火山灰の岩場は足を滑らせやすく、足元をしっかりと見据えなければなりません。ふと登山道の右側を見上げると、そこには巨大な細長い岩場があり、背丈以上もある高さの岩が、何十メートルも続いています。広大な富士山の大自然の中では、巨大な岩場でも小さく見え、さりげなく歩き過ぎていきます。

それにしても、何という良い



天気なのでしょうか。気がつくと、 空は澄み渡る青色。しかも風さ えもほとんど吹いておらず、時間 が経つにつれて、さらに気温が上 昇していくのです。用意していた トレーナーも、登山道を進むに つれて汗が止まらなくなり、すぐ に脱いで長袖の薄手のシャツ1枚 になりました。それでも汗をかく ほど暖かい日差しに恵まれたこ とが意外でした。また、好天に 恵まれたこともあり、綺麗な雲 海が広がる雄大な景色を満喫す ることができただけでなく、雲 の合間からは、太平洋沿岸を遠 くに眺めることもできました。ま た、西日本を覆う低気圧の雲と、 その後に続いている台風の影響 から西方には厚い雲を確認する ことができ、さすが、富士山だ と感無量な気持ちになりました。

登山中、下山してくる人に出 会う際には、お互いに「こんに ちは! | と声を掛け合うのが登 山の礼儀です。と言ってもオフ シーズンの富士山では人影はま ばらであり、前後には遠くに数名 ほど人の姿が目に入る程度です。 オフシーズンの富士山は、一人 でも楽しむことができ、格別な 気分を味わうことができます。 暫く歩き続けると、夫婦と小学 校高学年の女の子が下山してく るのが目に入り、「頂上の景色 はどうでしたか?」と声をかけて みました。ところが意外にも 答えは、「子供が頭が痛いとい うので、頂上の手前であきらめ て戻ってきました」と言うのです。 後、もう一息という所で、高山 病の症状が出たことから大事を とり、頂上を目前にしながらも 下山することは、違った意味の 勇気がいることだと思いました。

さらに歩き続け、標高も3000mを過ぎて元祖七合目の小屋を横目に通り越していくと、それまでのごつごつした岩が、段々と砂のような火山灰のかけらでできた山道に変わっていくことがわかります。岩場の合間に火山灰の砂がどんどんと多くなってくる印象です。足を踏み出す度に、じゃり、じゃり、と聞こえる足音が、不思議と大自然の中を登山しているという実感を湧かせてくれます。しかしながら、足元が緩いのも事実であり、足を滑らせやすくエネルギーを消



耗しやすいので、注意が必要でした。そのため、富士山の登山道にはロープが張ってあり、誰でも迷わず、規定の山道を登山することができるだけでなく、転びそうになった時には、すかさず掴むこともできます。

高山病の症状を初体験!

携帯電話もなく、普段から時計を持ち合わせていないことから、正確な時刻がわからないまま登山をしていました。しかしながら秋分の日ということもあり、太陽の位置や日照の角度から、およその時間を察することができます。正に、古代の民と同様の境地を体験していたのではないでしょうか。そして出発から1時間半ほどで、八合目の山小屋に辿り着きました。八合目からは、富士山頂上浅間大社の奥宮境内地と言われ、いよいよ、聖域に入ったことがわかります。



山小屋から見て左側にはロー プの向こう側に大きな鳥居が立っ ています。せっかくですので、ロー プを越えてごつごつした岩を登り、 鳥居の前まで行って跪き、お祈り をしました。鳥居は神の守護の 象徴であることから、聖山で祈り、 鳥居をくぐることもまた、大切な 儀式ではないでしょうか。それに しても相変わらず人の姿は疎らで す。あまりに素晴らしい天気だっ たことから、自分だけが体験する のではもったいなく思えてなりま せんでした。しかも時間が経つ につれて、更に気温は上昇し続け、 いつしか富士山の山頂付近は、9 月下旬にしてはありえないような 夏日の様相となっていたのです。

ところが登山にはハプニング がつきものです。ひらすら急斜 面を歩き続けているうちに、酸 素が薄くなってきたからでしょう か、だんだんと意識が朦朧とし てくる感じがしてきたのです。当 初は標高が高くなってきている ことから当たり前のことと思い、 大して気にもせず、水分をしっ かりと補給しながら呼吸を整え て歩き続けていました。ところ が、暫くすると頭が更にボーっと してきただけでなく、軽い吐き 気を覚え始めたのです。ちょう ど、初マラソンで脱水症状にな り、吐き気をもよおしながら走 り続けた時と同じ感覚です。我 慢をして歩き続けることにも限界 を感じ、このままでは絶対に まずいと自分に言い聞かせ、一旦、 休憩をすることにしました。

これが高山病の症状かと、初めての体験だけに、暫く様子を

見ることにしました。かなり速 いペースで歩いてきたこともあり、 時間には余裕があったことから、 岩場の影で20分ほど横になって いました。その後、立ち上がって 歩き始めると、体調は少し回復 していたことがわかりました。そ れでも一旦歩き始めると、意識 の朦朧感が少しずつ悪化し、時 折、軽い吐き気がしたため、も う一度、今度は休憩を長めにと ることにしました。2回目の休 憩は30分ほどでしたでしょうか。 登山でこんなに長く休憩をとった ことはこれまでありませんでした。 しかしながら、この休息が功を 奏し、以後は吐き気もなく歩くこ とができるようになり、ほっとし ました。さすがに朦朧感はなく なりませんでしたが、富士山の頂 上では誰しもこんなものではな いかと思い、何ら気にせず登山 を続行することにしました。

やがて九合目の萬年雲山荘 に辿り着きました。もう一息で 頂上です。そこからの景色は正 に圧巻です。これまでの長い 登山道を振り返ると、その先に は雲海が広がり、雲の合間か らは遠くに下界の平野部が目 に入ります。長かった登山道の 疲れも、この景色を見るだけで、 癒されるような思いです。また、 登山道に沿ってジグザグに車 の跡が見えることは気になりま した。これまでの登山経験か ら、急斜面を上り下りするより も、ジグザグにより平坦な山道 を走った方が楽しく、時間も節 約できたことから、「このジグ ザグ道を走ってみたい」という 思いが脳裏をかすめました。こ れが下山の際、遭難の危機に 直面するきっかけになろうとは、 誰が想像できたでしょうか。



奇跡の無風状態で山頂を極める!

九合目から頂上までの道のり は、想像以上に長く感じました。 酸素が更に薄くなってきたこと もあり、意識も何となく頭が回 らないような感じで、ボーっと した状態が続きます。そこでこ れ以上酸欠にならないよう、無 理をせずにゆっくりと歩きなが ら、呼吸は深く、また、早く繰 り返して肺に入る酸素の濃度を あげながら登山道を歩き続け たのです。そしてやっとの思い で頂上に辿りついたと思いき や、そこは九合目半の胸突山 荘だったのです。その名前のご とく、心が砕かれる思いでした。 そこはまだ標高 3590 mにしか すぎず、頂上まで 186 mもの



標高差が残されていました。

しかしながら、後ろを振り返ると、南西方向には雲の向こうに太平洋が見渡せます。しかも静岡の焼津や御前崎の海岸線まで眺めることができたのです。富士山から太平洋を見渡すことが夢のひとつでしたが、見事に実現したのです。ここまで来たら、もはや、気合いで登りきるしかありません。

そして遂に午前11時すぎ、富士山頂上制覇の時が訪れました! 今度こそは本物の頂上です。まず、目にしたのは、「頂上浅間大社奥宮」と書かれた標識と鳥居です。富士宮口山頂を制覇した想いが湧いてきます。



そして少し歩き続けると、大 きな火口が見えてきます。快晴 であることから、壮大な火口の 色合いと形状の美しさをありの ままに肉眼で確認することがで き、感無量の思いに浸りました。 そして火口の左手には富士山の 頂点を極める、標高 3776 mの 剣ヶ峰が見えます。ちょうどその 時、ランニングウェアを着ながら、 ゆっくりと歩いている 20 代と思 われる男性に出会いました。山 頂まで走ってきたランナーがい るとは凄いと思い、声をかけて みると、意外な答えが返ってき ました。「頭が痛くて走るどころ ではないんです」と。明らかに高 山病の症状であり、可哀そうで した。そして剣ヶ峰に向かって急 斜面を登り始めると、今度は30 代前後の男性が下りてきたので、 「剣ヶ峰はどうでしたか」と聞く と、「もう、足がもたなかったので、 途中で引き返してきました」と小 声で言うのです。

察するに、富士山の頂上では、高山病のリスクと、登頂の喜びは、常に共存するようです。 実際には、多くの登山客が高山病に悩まされているようであり、本当の意味で健康体のままに頂上を楽しんでいる人は少数派であるというのが、現実のようです。高山病の危険は既に感じとっていましたが、幸いにも自





分の場合は、八合目から九合目 に生じた吐き気を克服してから は、頭がボーっとしている以外 は極めて快調であったため、何 ら心配する必要がないように思 われました。そして、旧富士山 測候所の先にある富士山最高峰 剣ヶ峰に向けて一気に登りつめ、 日本国内では自分以上に天に近 い人がいない場所を目指したの です。そしてドーム跡の真下ま でくると、そこには「二等三角 点「富士山」」と刻まれた石碑 がありました。正にこれが、今、 自分が標高 3775.63 mの場所 にいる証でした。そしてその先 には、待ちに待った「日本最高 峰富士山剣ヶ峰三七七六米」の 石碑が見えてきました。感動の 瞬間が訪れました。名実ともに、 日本列島の最高峰、富士山を制 覇したのです。



感激のあまり、しばらく我を忘 れていました。そしてふと気がつ くと、何と、9月下旬の富士山頂 が無風状態になっているのです。 そして太陽は燦々と照り、ちょっ とした夏日の様相です。紫外線 も強く、肌が熱く感じられます。 それでも真夏の太陽を山頂で 浴びているような感覚は変わら ず、夢か幻のようでした。しかも 暫くの時間、たったひとりで日本 の最高峰に居たのです。せっか くここまできたので、もっと高い 所に登ろうと思い、観測所の階 段のチェーンをかいくぐって登り、 3776 mを更に超えた標高まで 登りつめました。そこから見る下 界の景色は絶妙であり、言葉で は言い尽くすことができません。



(富士山頂ではハプニングも付きもの)

オフシーズンの富士山では、 剣ヶ峰まで登頂する人はごく僅か です。そして9月23日の一時、 自分より誰一人として天に近い人 が日本列島には存在しないこと に、ふと、優越感を感じていまし た。そして一旦、階段を降りると、 剣ヶ峰まで登ってきた3人の外国 人に出会いました。早速、英語

で話しかけると、ドイツに住んで いるフランス人のグループでした。 そこで、お互いの写真を交替で撮 り、自分はあまりに温かかったの で、つい上半身裸のまま、写真を 撮ってもらいました。富士山の頂 上だからこそ、ありのままの姿を 大切に記録したかったのです。

そこで思わぬ事態に遭遇しま した。遠くの山々を写真に収め ようとシャッターを押すと、何と、 コンビニで購入した39枚撮り のカメラのフィルムが切れてし まったのです。人生の最高の日だ というのに、何ということでしょ うか。残された答えはただ一つ。 彼らにお願いして写真を撮っても らい、後で送ってもらうしかあり ません。そこで友達になった外 国人の一人に観測所の階段を一 緒に上がってもらい、2人でそこ から遠くの写真を撮ることにしま した。思わぬハプニングではあ りましたが、別れる際に自分の 名刺を渡して、必ず連絡をしてく ださることをお願いしました。残 念ながら、このグループからは 未だに連絡がありません。

とりあえず、山頂からの写真 を数多く撮れたことに安心し、 下山する前に、富士山の火口を 一周することにしました。その 時点では、おそらく感動のあま り、時間を忘れていたようです。 そもそも携帯電話もなく、時計 も持っておらず、太陽だけを見な がら、およその感覚を掴んでい ただけなので、正確な時刻を知 る術がありませんでした。火口 を一周するのにどれだけ時間が かかるか、事前に調べてもいま せんでした。ただ、目の前に火 口全体を見渡すことができたこ とから、さほど時間がかかるよ うには思えませんでした。頂上 は無風状態が続き、あまりの天 気の良さに嬉しくて仕方がなく、 何事も苦に思えなかったのです。

おそらくその時、時刻は午後 2時を回っていたことでしょう。 そんな時、頂上を自分と同じく 一周回ろうとしている 20 代の 外国人を2人見つけました。早 速声をかけてみると、ドイツか らの旅行者であり、オフシーズ ンの富士山に登らずには帰国で きないと熱く語るのです。2人 共、短パン姿であり、驚くほど の軽装です。正に怖いものなし の境地なのでしょう。そして周 囲を見渡すと、頂上周辺にはど こにも人影が見えなくなっていま した。9月23日、この3人が、 富士山の山頂から下山する最後 のグループとなったのです。そこ で3人で話し合い、火口を一緒 に一周してから下山することにし ました。彼らは新宿のユースホ ステルに宿泊し、もうこの時間 では五合目からのバスもないこ とから、ホテルまで車で送って あげることにしました。 1時間

ほど頂上を散策するうちに、すっ かり仲良くなり、貴重な写真を 何枚も撮ってもらったのです。



ふと、太陽を見ると、その位 置からして午後3時を過ぎて4 時近くになっていることに気が つきました。考えてみると、午 後6時前後には日没となり、暗 くなるはずですから、残り2時 間少々で下山を終えなければな らないのです。そこで、すぐに 下山を開始することにしました。

【富士山で遭難の危機に遭遇!】

今振り返っても、なぜ、自分が 登山道を離れて車道を走り始め たのか、わかりません。 3人で一 緒に頂上から下山を始めて少し 経つと、山道の脇に例の道路が 見えてきたのです。これまでの 経験からすると、登山道を歩い て下りるよりも、車道を走った方 が早いことから、何も考えずに 二手に分かれて、自分は車道を 走ることにしました。五合目から 登山を始めた時に、最初に少し だけ歩いた道の延長線にあるジ グザグ道のように思えたからで しょうか。深く考えることもなく、 吸い込まれるように、自分だけ その道を走り始めていたのです。 確かに頂上では終始、意識が朦 朧としていたことから、判断力が 鈍っていたのかもしれません。い ずれにしても、そのジグザグに 見える車道とはキャタピラ車が 通るだけの道で、人が歩ける道 ではないということを、全く知ら なかったのです。

走り始めてからすぐ気がついた ことは、これまで自分が体験した ことがない急斜面の火山灰から なる砂と岩の道のため、体のコ ントロールができないということ です。深い火山灰のため足場が 悪く、しかも斜面が急すぎるため、 一度、スピードがついてしまうと 止まることができなくなり、最後 は転んで止まるしか術がなかった のです。もうひとつの問題は、転 んだ際の痛みです。地面が砂の ように柔らかければ良いのですが、 砂のように見える火山灰の下に は岩が隠れており、転倒する度 に足腰を岩にぶつけ、あざがで きるほどの痛い思いをしたのです。

しかしながら、ここから引 き返して山を登る訳にもいかず、 仕方なく我慢して、早歩きをす るつもりで進むことにしました。 それでも何度も転ぶほど足場は 悪く、苦戦の連続です。ちょうど、 アイスホッケーで、氷上を足を 横にしてストップする感覚でし か止まることができなかったの

で、これはアイスホッケーの練 習と言い聞かせるも、止まるた びに何度も転んでしまいました。

そしてどのくらい時間がたった でしょうか。日の入りの状況から 見て、もう夕方の6時近くになっ ていたはずです。体力は消耗し 始め、転び渡れてきた矢先、やっ とのことで山小屋が見えてきまし た。これはおそらく七合目くらい の小屋かなと思って近づくと、何 と、富士山を登ってくる男性が いたのです。早速、挨拶をして 話を聞くと、今日はここでひと眠 りして、明日、山頂に行くとのこ と。そして愕然としたことに、何 と、そこはまだ、九合目半の山小 屋だというのです。これだけ時間 をかけて苦労して下りてきただけ に、全くその言葉を信じることが できませんでした、そして、そこ からは登山道を下ることにしまし た。日没の時間が過ぎたせいか、 辺りは一気に暗くなってきました。



八合目付近まで戻ってきた時点 では、あたりはすっかり暗くなっ てしまいました。明るい日中に歩 いても足場が悪く、滑りやすい登 山道だけに、夜に歩くことは危険 極まりありません。また、日中は 天候が良かったことから、月の明 かりを期待したのですが、月は昇 ることなく、かろうじて遠くの街 の灯りがかすかに見える程度です。 そこで手動式の懐中電灯を取り 出し、レバーを手で回しながら歩 くことにしました。しかしながら、 これほどまで足場が悪いと、腕を 動かすことにより体のバランスを 崩しやすくなり、かえって転びや すくなってしまったのです。

それから20分ほどでしょうか。 大きな岩に躓いて転んでしまい、 懐中電灯を落としてしまいました。 その際、レバーが取れてしまい、 真っ暗闇の中で、どこにいったの かわからなくなったのです。火山 灰が積もった岩場ですから、捜し ようがありません。大ピンチです。 夜の登山道で懐中電灯がなくして しまったのです。ここからは、自 身の勘と、遥か彼方に見えるかす かな灯りだけで下山しなければ ならないと思うと、危機感が増し てきました。まだ、七合目と八合 目の間と思われ、更なる苦難の下 山が待ち受けていたのです。

命綱のみが暗闇を生き延びる道

普通ならば後、1時間少々で 五合目まで下山できる所まで来て いたのではないでしょうか。しか しながら、暗闇の富士山登山道 は、地獄の道を歩んでいるのと一 緒です。それでも、先に下山した 2人の仲間が東京に帰るため、自 分を待っていると思うと、のんび りはしていられません。何とかし て、五合目まで下山する方法はな いかと試行錯誤を繰り返しながら 得た結論はひとつ。それは転ぶ ことを恐れることなく、登山道沿 いに張ってあるロープ伝いに、猿 飛佐助のように下山することです。 幸いにも手袋は2ペア持っていた ので、手に二重に装着し、下りる ことにしました。この作戦は、実 はとても危険な行動でした。なぜ なら、ロープづたいとは言っても、 地面はでこぼこで、所々に大きな 岩がころがっており、躓いたり転 んだりすることが避けられなかっ たからです。また、少しでもスピー ドがついてしまうと、ロープを思 い切り掴まなければ体が飛ばされ てしまい、大けがをしてしまいます。

それでも急いで下山しなけれ ばならないと思い、何十回も転 びながら、時には岩に腰や足を 打ちつけても我慢して歩き続け たのです。また、ロープを頼りに 歩行するスピード調整をしたもの の、時にはバランスを崩して、ま るでサーカスをしているように、 宙ぶらりんになるようなことも幾 度となくありました。手袋も擦り 切れ始め、体力も限界に近づい てきました。それでも、五合目 までに戻ることを、あきらめずに、 人生は我慢と、心に言い聞かせ ながら、ひたすら七転び八起き の精神で、下山し続けたのです。

そして夜も8時を回った頃、 遠くにかすかな灯りが見えてきた のです。何とそれは6合目の山 小屋でした。必至の思いでその 灯りを目指して足早に進み、山小 屋の前に辿り着いた時には、も う、体力の限界で、小屋の前の ベンチに座り込んでしまいました。 すると、中から山小屋のおばさ んが2人出てきて、声をかけてく ださいました。そして事情を話す と、もう五合目は10分少々で行 けるとのこと。そこで 1000 円を 支払い、懐中電灯を購入してから 再出発です。そこからは懐中電 灯の光で登山道を照らし、最後 の力を振り絞りながらも、安心し て下山することができました。

五合目のレストハウスエリアに 辿り着いたのは夜の8時半。既 に周囲は真っ暗闇で、人影もあり ません。仲間のドイツ人は、山小 屋のおばさんの話によると2時 間以上も前に戻ってきたようなの で、きっと誰かの車に乗せてもら い、近くのホテルへと向かったの でしょう。悲しいやら悔しいやら、 情けないやら、それでも、最高の 1日であったと思えてくるのです。 事実、今もって自分の人生、最高 の思い出の旅であることに違いあ りません。オフシーズンの富士山 登頂を無事、完結することができ ました。感謝! (文·中島尚彦)





[業務]静かな雰囲気の温泉施設フロント受付 [資格] 車通勤可(大駐車場完備)、未経験者も歓迎 [時間] 16:00~22:00 内で応相談

土日祝日できる方、主婦・学生歓迎

[給与]時給 900円

[待遇] 大紀 (完備、従業員家族を当館へ無料優待 [応募] 下記へ電話連絡の上、履歴書を持参ください ※正社員も同時募集、お気軽にお問い合わせください

5問合せ 0476-28-81



www.soundhouse.co.jp

WEB サイト案内

日本シティジャーナルをご覧いただきありがとうございます。 本紙のバックナンバーは WEB サイトにてすべてご覧頂けます。 連載中の歴史に関するコラムは最新情報に随時更新して スペシャルサイト「日本とユダヤのハーモニー」にまとめて あります。ご意見・ご要望等をお待ちしております、FAX や ホームページからお寄せ下さい。

日本シティジャーナル:http://www.nihoncity.com/ 日本とユダヤのハーモニー: http://www.historyjp.com/



秋が訪れて、さわやかな紅葉のシーズンを 楽しめると思いきや、連日のように荒れ狂う集中 豪雨や台風のニュースが続き、心穏やかでない 日々を過ごした方も多かったのではないで しょうか。これまでにない記録的な豪雨は何を 意味しているのか、専門家の間でも意見は 分かれるようです。人間は大自然に育まれ、 生かされている存在であり、地球をしっかりと 管理する使命を持っています。だからこそ、環境 保全にみんなで真剣に取り組み、自然を守ら なければならないと思うこの頃です。

NCJ編集長 中島 尚彦 1957 年東京生まれ。14 歳で 米国に単身テニス留学。ウォートン

ビジネススクール卒業後、ロス こンポススク ルギ来後、ロバアンジェルスにて不動産デベロッ パーとして起業、ビジネス最前線で 活躍する。1990年に帰国後、 成田にサウンドハウスを立ち上げる。 現在ハウスホールディングス代表、 日本シティジャーナル編集長を 兼務。趣味はアイスホッケーと 読書、ここ数年は「日本とユダヤの ハーモニー」の執筆に勤しむ。



編

集

後